



n-gram統計による 語形の抽出と複合語

——平安時代語の分析から——

1 はじめに

古典語にせよ、現代語にせよ、日本語において、一語をどう認定するかは、その基準の立て方にも様々な立場があり、従来から多くの研究がなされてきた。そもそも単位をめぐる基準からして、一通りではない。どのような単位をもって単語と認めるかと言うこと自体難問も多く、たとえば国語研究所による各種の研究において、 α 単位・ β 単位のように二種の異なった単位が提案されてきたこと(注1)なども、その難しさをよく物語っている。こうした、日本語の単語認定の難しさを、端的に反映しているのが複合語である。複合語をめぐって

は、これまで、1. 形態論的な観点(注2)、2. 音韻論的な観点(注3)、3. 統語論的な観点(注4)、4. 意味論的な観点(注5)のおよそ四つの観点から、定義と分析がなされている。外国語との比較対照も進められており(注6)、縦横に論じ尽くされているようではあるのだが、旧来から指摘されている、索引や辞書語に立項する際の複合語認定のあいまいさや(注7)、単純語や慣用句や文との境界が不明確な場合について(注8)など、必ずしも解明されたとはいえない問題が、依然残されているのも事実である。それは一つには、理論と実態のかみあいの難しさによるところもあるのであって、また複合語の認定というものが、主に研究者の内省に





依つてなされてきた事と無関係ではあるまい。索引・辞書語の複合語の立項の揺れなどには、各編纂者の、おのの学説も含めての内省の違いの反映と言ひ換えることが出来る点も少なくない。文法や語彙・語法研究における内省の重要性はもとより疑うべくもないが、現代語と異なり、内省には限界のある古典語を対象に、複合語の語形や意味論的実態を抽出・分析しようとする場合や、社会生活の中で、日々、派生や複合によって語の新造が繰り返されていくあり方を総合的に考察しようとする時、言語現象のより正確な把握のために、内省とあわせて、コーパスを網羅調査し、用法に即して、実態としての複合語を客観的に取り出す試みが検討される試みも必要となるのではないかと思われる。本稿では、以上のような観点から、平安時代の文学資料を対象に、統計処理の手法を用いた複合語のコーパスからの抽出と分析の方法を提案し、具体的結果から得られる知見の一端を示してみたい。

2 日本語の語構成と正規文法的規則

まず、従来の複合語研究ではほとんど言及されてこなかったが、コーパス上で統計処理によりながら日本語の

単語や語構成について見ていくときに特に明確となる、日本語の語構成についての性格を指摘しておきたい。それは、日本語の語構成に内在する正規文法的規則という点である。正規文法とは、別名3型文法とも言われるが、形式言語の分類のひとつであり、遠く離れた要素同士が呼応するいわゆる句構造文法(2型文法)とは異なり、基本的に、ある要素の直後に次の要素が来るといふ単純な連接からなる文法規則である。この点から見ると、日本語の語構成には、次の二つの側面において、正規文法的規則が内在していると考えられる。

まず第一が、「走りだす」「目じるし」「巢づくり」といった自立語どうしが接合した複合語の場合や、「菜の花」「憎まれっ子」「取られぞん」などの自立語に助詞や助動詞が接合したものの場合である。これらの複合規則に文の文法構造に似たものが見られ、それは基本的にはいわゆる句構造文法(2型文法)によることが奥津敬一郎などによって既に指摘されている(注9)。実際に、各要素が頭から順に接合しないもの(句構造文法の樹形図では右分かれ構造となる)の例として「(おお)(やま)(ざくら)(ん)」などの例があげられるのであるが、実はこれは生物の名称などに多い例外的な構造である。基本的には補足語に述語が単純に接合したり(「山登り」「大殿ごも



る）、自立語に付属語が順に接合したり（生まれながらの「何としても」といった正規文法的規則がその大半に見られ、それで多くがカバーできるということもまた指摘できるだろう。日本語の助動詞の連接については、「国語の活用形は、係結による結びの拘束を除けば直後にどんな言語要素が来るかによって決定される。これを言ひ替えると、或活用形が現れればその直後に來得る言語要素の範囲が決まるといふ事になる」として、日本語の活用形や文法の性格の問題として理論化した水谷静夫の3型文法（正規文法）の論があるが（注10）、その指摘は語構成にも及ぼし得るものと考えられるのである。

次に第二の点として、漢字同士が接合して（「花」＋「道」で「花道」、「日本」＋「製」で「日本製」、など）新たな単語を形成するという問題である。これは漢字の表語（形態素）文字としての性格から、文字と文字の接合によって新たな単語を形成できるということに原因すると思われる。新聞などによく見られる「対＋米＋交渉」「省＋電力＋化＋努力」のような漢字の合成によるいわゆる「臨時一語」などはその典型であるが、ここにも、ある字や要素の次にどのような字や要素が接合するかという比較的単純な正規文法的規則が多くの場合に見られる。後者の点は、漢字が文字単位で連接することが、複合語



の形成に大きな役割を果していることを意味している。以上のように、複合語の形成ということの理論的基盤の一つとして、正規文法（3型文法）の規則を考えなくてはならないことは明かであると思われるが、助詞・助動詞の連接に限っても、先に触れた水谷の論以後、実状としては、あまりこの方面の研究には進展がなかった。それは、水谷の研究がそうであるように、文字列や単語の正規的な構造を取り扱っていくには、手法として計算機を用いた統計処理や考え方がかなりの程度必要であるのに対し、従来そのツールやデータに制約や限界が大きかったことが一因であったに違いない。

ところが、近年、計算機の高速度・大容量化によって、従来より大きな記憶装置を使うことが可能となり、そうした面での制約が解消される中から、日本語語構成の正規的な構造の分析に新展開をもたらし得る画期的な手法が開発された。長尾眞・森信介「大規模日本語テキストのnグラム統計の作り方と語句の自動抽出」（注11）がそれである。次に、この手法の概要を示し、古典語分析への適用について述べていこう。





3 情報理論 n -gram 統計によって 古典語の語形を切り出す

さて、 n -gram 統計とは、C・シャノンによって立てられた情報学の基礎理論の一つであるが(注12)、言語情報を単位の連続の確率で分析していくという理論の性格上、前述した、単位が順に連なる性格の強い正規文法的パターンをもつ日本語のような言語構造を扱うのに極めて適した言語理論という側面も持ちあわせているものである。長尾眞・森信介によって開発された手法とは、このシャノンの n -gram 分析の言語学的実践とも評すべく、独自のアルゴリズムによって、きわめて高速に、文字連鎖 n 文字列そのものを抽出し統計をとることを可能にしたものである。その原理をごく簡単に言えば、2文字、3文字、4文字…… n 文字、と文字数を大きくしながら、 n までの任意の長さの文字列をテキスト中から網羅的に抜き出すものである。これによって、テキスト中のすべての文字の連接パターンを取り出すことができするため、結果的には文字の連接だけでなく、あらゆる語形を出現頻度数とあわせて網羅的に抽出することが可能となった。先に述べた複合語である「巣づくり」「対交渉」などとどまらず「日本語解析システム開発研究

所主任研究員」といった長大な複合パターンが取り出されるのはもちろんのこと、特に、長尾・森の研究では、電子出版資料(2036万文字、59MB)を中心とした大規模なコーパスに対して分析を行い、従来の研究で組立て形式などと称されてきた「しななければならない」の様な語形(長尾らはこれを「複合文字列」と称する)や、「影響を」――「与える」、「影響を」――「受ける」のような強い共起性のある単語群(連語・慣用句)などを、網羅・自動抽出することに成功している。

今後、現代語の語形・語構成研究での進展が期待されるところであるが、当然その手法は古典関係のコーパスにおいても有効である。稿者は現在、長尾・森プログラムの n -gram 分析を古典語・古典文学に応用する共同研究を進めているが(注13)、単に対象を古典語のコーパスにするというだけではなく、(1)位相差のあるテキスト間の語形の抽出という観点を導入し、その実現のために、(2)複数のテキスト間の総文字列比較システムの構築(n グラム集合演算法)を試みて、新たな展開をはかっている。(1)でいう位相差とは、性差すなわち男女差や、『源氏物語』と『宇津保物語』といった作品差、あるいは散文作品『源氏物語』と韻文作品『古今和歌集』というようなジャンル差などを指すのであり、



これら位相差のあるテキストどうしを、総文字列比較することで、比較したテキスト間に共通する語形や、一方のテキストにしか出現しない語形をすべて取り出そうとすることである。性差への着目ということから、具体例をあげてみよう。次は『古今和歌集』の男性の歌と女性の歌を総文字列比較し、男性の歌にしか出現しない語形を分類したものの一部である。

A. 単語・複合語・付属語接合

【名詞・複合名詞】

〔植物〕をみなへし・もみぢば・うめのはな・はぎ・ふじばかま・わかな・わすれぐさ／〔虫〕うつせみ／〔天象〕あまのかは・たなばた・くもあ・ふくかぜ／〔色彩〕しらゆき・しらくも・にしき・しらたま・しらつゆ／〔その他〕あきのの（秋の野）・はるのやまべ（春の山辺）

【動詞】なびく・わたらむ

【形容詞】つれなき・さむく・さむみ・よをさむみ

【付属語接合】かりける・かりけり・かりけれ・かるべき・ならなくに・ありけれ・あるかな・しなければ・ぞちりける・からに・にけるかな・にこそありけれ・まにまに

B. 特定の語を核とした述語類

【「飽かず」を核とする語形】あかず・あかずして・あかで・あかぬ

【「逢ふ」を核とする語形】あはで・あはまし・あはむ・あふこと・あふさかのせき・あふよ・あふよしもがな

【「くに出づ」を核とする語形】いろにいで・いろにはいでし・ほにいでて

【「思ふ」を核とする語形】おもはず・おもはぬとき・おもはまし・おもはむひと・おもひおき・おもひきや・おもひきゆ・おもひけむ・おもひける・おもひおき・おもひそめ・おもひぬる・おもふころ・おもふころかな・おもふひと・おもへども・おもほえ・おもほゆ・ものを

おもふ・ひとをおもひ・ひとをおもふ

【「通か」を核とする語形】かよひぢ・かよひて・かよふ・かよへる

【「恋ふ」を核とする語形】こひしかり・こひしかりける・こひしかる・こひしかるべき・こひしきものを・こひしと・こひつつ・こひは・こひはし（恋死）・こひむと・こひもするかな・こひやわたらむ・こひわたる・こふる

【「知る」を核とする語形】しらねど・しらまし・しられず・しられぬ・しりぬる・しるひと・しるべく・しるらむ





【「見る」を核とする語形】みえし・みえず・みえなむ・みえぬ・みえね・みえねど・みえわたるかな・みむひと・みもせぬ・みるまで・みるらむ、とみゆらむ・とみるまで・ともみえず

男性に独自に出現する語形の一部を例示した。文学作品である『古今和歌集』を言語資料として用いるには、もとよりその文学としての特質を熟知した上での慎重な取り扱いが必要だが、和歌が、作者名が明記されており、詠み手（＝話者）の性別が判然としている点で、古典世界の言葉と性差の関係を考察する際に有用度の高い資料でもあることは、従来以上に留意されてよい。特にこのような分析に『古今和歌集』を用いることの、メリット・デメリット、ならびにこれまでの研究の経緯については別稿を参照されたいが（注14）、男性の歌と女性の歌をnグラム集合演算法で総文字列比較をすると、上記のように、名詞はもとより、活用語尾まで含めた動詞・形容詞、しかもそれが打ち消しの助動詞や意志の助動詞を伴う場合など、さまざまに複合した語形そのもので取り出されてくる。更に一部の語形は、ある語を核とした語形群としてまとまりを帯びてくる。仁田義雄は、語を文法的な意味、機能を帯びた単位として定義していく中で、

「文の中に現実に現れるのは、語ではなく、語形である。」として、文を形成する語形群（例えば「男を・男の・男にこそ」と言った範列的語形系列）に注目しているが（注15）、これらはそれに非常に近いものと言える。先の表で「特定の語を核とした述語類」とした項目は、「特定の語を中心とした範列的語形系列」と言い換えることもできる。すなわちnグラム集合演算法の総文字列比較によつては、対象としたテキストやコーパスから、そのテキスト中に現実に現れる「語形」を網羅・抽出出来る訳であり、ここからは、実態としての「語形」を対象とした研究が可能となると言えよう。

加えて、そこに位相差という軸を持ち込むと、それらの取り出された語形の用法や意味的側面が、更に見えやすくなる。「白雪」「白雲」「白玉」「白露」など色彩「白」と複合した語は、『古今和歌集』では何故か男性側に用例の集中する語となっており、「飽かず」「逢ふ」「くに出づ」「思ふ」「通ふ」「恋ふ」「知る」「見る」などを核として形成される各種の語形や複合語も同様であることになる。「知る」や「見る」など、対象に働きかけてこれを知覚しようとする語形や、「恋ふ」「思ふ」など思惟する主体をあらわす語形、対象に向かって行動する「通ふ」の語形などが男性側に集中してくるなど、こう





した作業によって、各語・各語形が性差という切り口でカテゴライズされることになる訳である。

このような実態としての「語形」を対象とする時、何が見えてくるのか、一例として「飽かず」を核とする語形」をあげてみよう。男性の歌だけに偏る語形として「あかず」「あかずして」「あかで」「あかぬ」が切り出されてきた訳であるが、これらはみな、動詞「飽く」+打ち消しの助詞・助動詞の語形となっている。当然のことながら、われわれは、複合しない「飽く」の語や名詞「飽き」も平安時代語の中に普通に存在しており、またその用法に男女差はないと想像してきたものと思われるが、結論から言つて、「飽く」は読人不知歌などに5例あるが、うち2例は掛詞や物名歌で（「灰汁（あく）」と掛けたりする）、名詞「飽き」に至つては、「秋」との掛詞の形でしか存在していない。和歌のレトリック上出現する、特殊な語形という色合いが強い訳である。対象を『源氏物語』に拡大し、「飽く」に関する語形すべてを調べると、そこでは一層顕著に、(1)「飽く」は、「あかず」「あかで」「あかなく」「あかさりし」など打ち消しの助詞・助動詞と結びついた複合語形で存在しているのが一般的で、「飽く」は例外的、(2)「飽かず」関係の語形の主語は、大半が男性で、女性の用例は少なく、用



法も限定的、という結果が得られる。用例数の内訳をあげると、『源氏物語』での「飽く」は全154例あるが、打ち消しを伴う複合語形が143例であるのに対し、そうでないものはわずか3例（「飽く」1例、「飽かれぬべき」1例、「飽きにたる」1例）にすぎない。また、主語の男女別は、男性105例に対し、女性19例（残り21例は、世の人々・世間などが主語）と、やはり男性に偏っている。そして女性の用例は数的に少ないだけではなく、内容を検討すると、母↓息子・祖母↓孫など血縁の親子関係にあるものが5例、死者を指して「あかず」と言ったものが6例を占めるなど、用法に目立った傾向があることがわかる。いわばこの語形には、身分・血縁・生者と死者など社会・制度で上下関係にあるものの、より上位者が用いるという意味性があったのであり、結果として男女比においては、いわば社会的優位に立つ男性の用例が圧倒的に多くなるのではないかとということが推測されてくるのである。

このようにして、言語の支柱を成す語形の実態、位相差・意味性、あるいは各語の本質をうかがわせるような問題が具体的にようになってくるといえよう。抽出された語形をめぐっては、興味深い現象が色々あるが、以下では、複合語に関わる問題提起として、もう一つ「春の山辺」





という語形を取り上げてみたい。

4 意味論的複合語―「春の山辺」―

男性の歌にしか出現しない語形として切り出されてくる「春の山辺」は、統語的には名詞十助詞十名詞で構成される名詞句という以上の情報は持たない。通常は単語とみなされることはなく、各種の国語辞典はもちろんのこと、片桐洋一『歌枕・歌ことば辞典 増補版』（注16）、馬場あき子・久保田淳『歌ことば歌枕大辞典』（注17）といった近年の代表的な歌語辞典にも立項されていない。現代人の語感では、注意の払われようのないものであるのだが、『古今和歌集』において、男性だけに用例のある語という観点から、前後の用例を調べると、それが複合語として機能していった道筋が明らかとなる。まず、『万葉集』の用例を概観する。

春日野の山辺の道を恐りなく通ひし君が見えぬころか
も
ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶ
せかりけり
ぬばたまの夜渡る月を留めむに西の山辺に塞もあらぬ
(卷4・518・石川郎女
(同・769・大伴家持)

かも
垣越しに犬呼び越して鳥狩する君青山の葉繁き山辺に
馬休め君
(卷7・1077
(卷7・1289)

単語「山辺」は、『万葉集』では用例も多いが、「春の山辺」の語形は一例もない。その用法は所掲の用例に見るように、「春日野の」（地名）、「西の」（方角）、「葉繁き」（形容詞）など、どのような単語とも結びつき得る語として働いており、固定的な結びつきは全く認められない。また、石川郎女のような女性歌人の用例もあり、男性に偏る傾向も見られない。ところが、『古今和歌集』においては、万葉と同様の用例以外に、以下のように「春の山辺」の語形が出現する。

いざけふは春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の
影かは
霞立つ春の山辺はとほけれど吹きくる風は花の香ぞす
る
梓弓春の山辺を越えくれば道もさりあへず花ぞ散りけ
る
宿りして春の山辺にねたる夜は夢のうちにも花ぞ散り
ける
(春下・95・素性)
(春下・103・元方)
(春下・115・貫之)
(春下・117・貫之)





思ふどち春の山辺にうち群れてそこともいはぬ旅寝し
てしか
(春下・126・素性)

歌人はすべて男性で、用例は「春歌下」に集中しており、しかも全歌は共通する文脈と意味を持っている。それは、男性が、「花」で彩られた「春の山辺」を「越え」「まじり」「寝」という、女性との一夜の契りを持つイメージの文脈であり、ここでの「春の山辺」は、「契る対象としての女性」という象徴的(喩的な)意味をもって機能していることになる。この「春の山辺」は、『古今和歌集』内部だけの一過性のもではなく、以後も、同様の象徴的な意味をもつ語形として用いられており、女性歌人には、

我が宿し春の山辺のつまなれば他の花とも思ほえぬか
な
(中務集・37番、中務10世紀歌人)
夜ごとただつくる思ひに燃えわたる我が身ぞ春の山辺
ならまし
(大弐三位集・50番、大弐三位11世紀歌人)

のように、「我が宿」を「春の山辺」の一部としたり、更には「我が身」||「春の山辺」とする用語例が散見するのである。反対に、男性にはのちのちまで「春の山辺」

||「我」とした用語例は無いなど、意味を反映した、性差による使い分けも際だつて明確になされていたことがうかがえる。『古今和歌集』の成立は九〇五年、すなわち一〇世紀はじめで、ここにあげた中務は一〇世紀中頃の歌人、また大弐三位は一世紀前半期の歌人のなので、少なくとも一世紀以上、「春の山辺」は特定の意味性を伴う、一まとまりの語として用いられていたことになる。意味論的な強い結合が、一〇〇年以上続いたという点において、これを複合語と認定するのが適当であろう。これらのように、社会的・文化的背景や事象をフィクターとして、特定の意味を属性として新造される複合語を、意味論的複合語と称したい。

「春の山辺」は、和歌という文学領域に属する語ではあるが、ここでの問題は、現代語まで含めた実際の言語現象の中の、ある語形群に共通する一つの性格に敷衍することが可能であろう。山本清隆が指摘する(注18)、幸福の象徴を意味する「青い鳥」や、「赤い羽共同募金」の「赤い羽根」などが同じ性格を持っているのであり、これらは形態やアクセントからは複合語とは言いがたいが、特定の意味で用いられる限りにおいて、一語と認めざるを得ない。従来の研究では、このような意味論的複合語は、恣意的に見いだすしかなく、網羅的に抽出する





ことが極めて困難であるため、意味論的であり方の種類や、それが複合語全体でどのくらいの位置を占めるのかなど、全く明確にされてこなかったが、古典語・現代語を通じて、この種の複合語は相当数にのぼると予想される。位相差のあるテキストやコーパス（男性・女性という性差だけでなく、たとえば、世代差―二十代・三十代・四十年代・五十代・それ以上の会話語、時代差―明治時代の文学作品と大正・昭和の文学作品など、位相差は様々に設定し得る）の総文字列比較から語形を切り出し、これを分析する手法を応用するならば、現代の和歌研究者には認定の出来なかつた「春の山辺」の結合の強さや、性差を反映した意味性が抽出出来たのと同様に、ある位相だけに使われる語形⇨複合語という形で、様々な意味論的複合語が発見され、複合語研究の新しい側面が見えてくるものと思われる。

5 おわりに

以上、本稿では、現在の統語的観点から見た語構成論の主流である句構造文法（2型文法）とは異なる観点として、日本語の語構成における正規文法（3型文法）的規則を提案し、その規則によって展開している実態とし

ての語形を、n-gram 統計を用いて、コーパスやテキストから網羅・抽出する手法を示してみた。実態としての語形を網羅することによって、語や複合語をめぐる文法論、意味論、位相論などが、ある程度、総合的に深められるものと考えている。記して批判を乞う次第である。

注

- 1 国立国語研究所報告21『現代雑誌九十種の用語用字』（第一分冊 総記および語彙表）（国立国語研究所、一九六二）
国立国語研究所報告25『現代雑誌九十種の用語用字』（第三分冊）（国立国語研究所、一九六四）
- 2 阪倉篤義『語構成の研究』（角川書店、一九六六）
- 3 窪園晴夫『語形成と音韻構造』（くろしお出版、一九九五）
- 4 奥津敬一郎『複合名詞の生成文法』（『国語学』第百一集、国語学会、一九七五）、仁田義雄『語彙論的統語論』（明治書院、一九八〇）、影山太郎『文法と語形成』（ひつじ書房、一九九三）
- 5 宮地裕『敬語・慣用句表現論―現代語の文法と表現の研究（二）』（明治書院、一九九九）、山本清隆『単純語・複合語・派生語』（『日本語学』第14巻第5号、明治書院、一九九五）
- 6 竝木崇康『複合語の日英対照―複合名詞・複合形容詞―』（『日本語学』第7巻5号、明治書院、一九八八）、影山太郎（著書、影山太郎・由本陽子『語形成と概念構造』（日英語比較選書、研究者出版、一九九七）
- 7 宮島達夫『総索引への注文』（『国語学』第七十六集、国語学会、一九七二）、石井正彦『辞書に載る複合動詞・載らない複合動詞』（『日本語学』第7巻5号、明治書院、一九八八）



- 8 山本清隆「複合語と文の境界」(『日本語学』第15巻9号、明治書院、一九九六)
- 9 奥津敬一郎注4論文
- 10 水谷静夫『国語学五つの発見再発見』(東京女子大学学芸一九七四)
- 11 長尾眞・森信介「大規模日本語テキストのnグラム統計の作り方と語句の自動抽出(『自然言語処理』96—1、一九九三年)。なお本研究にあたっては、長尾眞先生(京都大学総長)、森信介氏(日本アイ・ビー・エム東京基礎研究所)のご厚意により、両氏の開発になるnグラム統計を高速に算出するソフトウェアを利用させていただいている。ここに記して深く感謝申し上げます。
- 12 Claude E. Shannon & Warren Weaver, *The Mathematical Theory Of Communication*, The University Of Illinois Press, 1949
- 13 近藤みゆき「平安時代和歌資料における特殊語彙抽出についての計量的研究と利用ツールの公開—古今和歌集の歌語と表現のジェンダー性について—」(『科学研究費特定領域研究 人文科学とコンピュータ 研究成果報告書—コンピュータ支援による人文科学研究の推進—199』(一九九九)、同「nグラム統計処理を用いた文字列分析による日本古典文学の研究—『古今和歌集』の「ことば」の型と性差—」(千葉大学『人文研究』第29号、二〇〇〇)、近藤泰弘・みゆき「平安時代古典語古典文学研究のためのn-gramを用いた解析手法」(言語処理学会第7回年次大会『発表論文集』二〇〇一)など。なおnグラム集合演算法の仕組みの詳細については、これらの論文によられたい。
- 14 近藤みゆき注13論文、ならびに、同「古今集の「ことば」の型—言語表象とジェンダー—」(国文学研究資料館 平成一三年度公開講演会「ジェンダーの生成」二〇〇一年五月一八日、於国文学研究資料館、発表資料：[URL=http://www.nijl.ac.jp/events/openlecture/01kouenkai.htm](http://www.nijl.ac.jp/events/openlecture/01kouenkai.htm)、二〇〇二年臨川書店より刊行予定。)
- 15 仁田義雄『日本語文法研究序説 日本語の記述文法を目指して』(くろしお出版、一九九七)
- 16 片桐洋一『歌枕歌ことば辞典 増補版』(笠間書院、一九九九)
- 17 馬場あき子・久保田淳『歌ことば歌枕辞典』(角川書店、一九九九)
- 18 山本清隆注5論文

